泡のような　きみはともだち

衿　さやか

いちばんはじめに、蝉が鳴いた。

三回目に回し始めた洗濯機の音をベッドの上で聞く。洗面所からはわざとらしい柔軟剤のサボンが香り、部屋全体が人工的な清潔の香りに覆われる。怠慢な日曜日。通知の来ないロック画面をただ見ているだけの、だらしない日曜日。投げ出された四肢は重だるく、ごうんごうんと響くモーター音だけがこの部屋で生きているようだった。【まごわやさしい】もう十年以上会っていない同級生がInstagramにアップロードしていた。子どもに食べさせたいとかなんとかいう栄養素の頭文字らしい。【まめ、ごま、わかめ、やさい、さかな、しいたけ、いも】大分類と小分類が混ざってるの、ばかみたい。意思とは切り離された親指の運動として「イイね！」を押して画面をスクロールする。最近の食事を思い浮かべる。ハンバーガーのバンズに申し訳程度にのったゴマと、柿ピーに入っているピーナッツをマメとカウントする。丁寧な生活の真似事をしようと思って買った【無添加】が謳われた成城石井のイチゴジャムは、ほんのり酸っぱくなっていて、多分ちょっと腐っているけれど、そのまま食パンに塗って食べた。自然酵母がどうのこうのという食パンもボソボソしていたし、やっぱり添加物でコーティングされたものがちょうどいい。それがニセモノのふかふかでも、クチビルに優しいのなら、それでいい。孫にも誰にも優しくないわたしは、長生きできないのかもしれないな。冷えが女性の大敵でも、効きすぎたエアコンの下で、タンクトップとショートパンツのまま、天井を見つめる。死体のように仰向けになって動かないわたしの耳に三回目の洗濯終了を告げるブザーが届いた。

約束だってしていないのに、夏は突然やってくる。例えば、誰にも会えない日曜日に、それは堂々とやってくる。心も身体も何の準備もできていないままのわたしは、楽しみ方も憂い方も受け流し方も分からず、見て見ぬふりもできないまま、なすすべもなく夏の到来を受け入れる。ベランダにはじりじりと容赦なく太陽が照りつけて、呼応するみたいにアスファルトからゆらゆらとした蜃気楼が立ちのぼる。洗濯機のモーター音が止まった部屋はいっそう静かになり、だけど耳を澄ませばエアコンのモーター音が微かにした。いちばんはじめに鳴いた蝉の声は、そのさらにうしろ側から、わたしを覆う空気と部屋を更に覆うようにして聞こえてくる。

1DK、駅徒歩十三分、家賃五万五千円（共益費込）、海外映画に憧れて買った白い猫足の陳腐なパイプベッドはあっというまに塗装がはげて、ブチ猫になる。のろのろと起き上がり、壁にもたれて、さっき干したバスタオルを見る。ショートパンツからのぞく足は、たいして陽にも当たらず、ダニに食べられた痕と自転車のペダルにぶつけた傷が目立ち、貧弱で痛々しかった。あのときの痣はまだ緑がかっていて、押すとじんわりと痛みが広がる。先週、久

しぶりに大きな駅へ行った。キャリーケースを引いたサラリーマンが忙しそうに横切ったとき、それにつまづいて思い切り転んだ。サラリーマンは振り返って目が合ったのに、舌打ちをしてそのまま行ってしまった。何か言い返すような言葉が出るはずもなく、睨みつけることができるはずもなく、痛くて、しばらくじっと、しゃがみこんだままでいた。痛みが引いても何となく起き上がるのが億劫で、少しの力を込める気にもならなくて、このまま駅の雑踏に溶けてしまいたかった。ふと顔を上げると、自分と同じくらいの年齢の母親に手を引かれた小さな男の子が、何か奇異なものを見るような目つきでじっとこちらを見ていた。それで、立ち上がった。夕立が来る前に、バスタオルを取り込まなければ。そう思うけれど、身体は動かず、夏を切り取った怠慢な日曜日に溶けてしまいたい、とまた思った。

そこそこの歴史の、そこそこの商事会社、福利厚生もそこそこよくて、人間関係もけして悪くはない。そこそこの規模であるようで、社内報や社内SNSでは、そこそこにいろいろな人が華やかに活躍している様子が特集されている。この会社の一員として、自分が働いているという意識や、何か大きなことに携わっているという感覚を持ったことがなかった。「自分ごととして捉える」「巻き込み力」「イノベーティブな」年始の社長からのビデオメッセージはいつも意味不明で、メッセージを聞くために集められた社員たちの頭髪の痛み具合やシャツの皺の寄り方をひとりひとり見ている方がずっと暇を潰せた。去年、国内のどこかの支社の人が自殺したらしい。きっとそのことを言いたいのだろう社長は繰り返す。「みなさん、みなさんは一人ではありません。周りの人に相談しましょう、私にいつでも連絡を下さい、繰り返します、みなさんは一人ではありません」だったらいま、わたしの座っている椅子のキャスターの動きがよくないことを社長に頼めばなおしてくれるのだろうか。

病院や介護福祉施設等の医療現場から届くのは、ゴム手袋とかガウンとか、エコー検査で使うゼリーとかキムワイプとか、注射針を安全に破棄する専用ゴミ箱とか、診療報酬明細書を印刷する紙とかインクとか、そういう毎日無限に消耗されていく商品の注文書で、だからわたしは、医療現場で今日も、いまも、行われているドラマみたいな現実とか、命のこととか、病のこととか、オペとかカテとかオンコールとか、オーベンとかネーベンとか、清潔とか手指衛生とか手技とか、感謝とか涙とか苦労とか、そういう生きて震えるものに触れたことがなかったし、触れたいと思ったこともなかった。高い器械が売れたらどうだとか、いまどき流行らない賄賂とか、まだある心付けとか、新しい薬剤とか治験とか利権とか、そういうことすべて、どうでもよかった。毎日耳に流れ込んできて、そのまま耳から抜けていくそういうことすべて、どうでもよかった。こういう消耗品がどこでどんなふうに使われているのかを考えることもなかったし、ただ座って毎日伝票を処理したり、メールを送ったりするだけでお給料がもらえてよかったなあ、と思っていた。医療は絶対になくならないし、うちの会社はけっこう大きいし、わたしは正社員だし、安心だなあ、と思っていた。そういう自

分をほんとうは、恥ずかしいと思っていたけれど、泥臭く震えるような労働の美しさに憧れていたけれど、でも、自分にはそういう生き方ができないことも分かっていたので、これでいい、と思っていた。納得していた。

入社してすぐの研修は、五日間、本社で行われた。四角くて、上が見えないくらい大きなビルだった。ピカピカのガラスの中で、入り口には自動改札機のようなものがあり、できたばかりの社員証をかざして入館するのが、少し照れくさくも誇らしくもあった。新入社員研修ではあんまり何をしたか覚えていなくて、入社したばかりなのにもうみんなお互いを【男】【女】と意識していて、誰が一番可愛いとか、ヤレそうとか、誰が一番仕事ができそうとか、実家が太そうとか、そういうことばかりを話していた。本社の近くの大きなビジネスホテルに宿泊し、少し目立ちそうな男の子の部屋に集まって、コンビニエンスストアで買った缶チューハイと缶ビールを持ち寄って、お互いがお互いを探るように夜な夜な宴会を繰り広げていた。研修中、目立った発言も発表もできなかったわたしは、誰からもその宴会に誘われなかったし、そういう宴会に参加している人を一歩引いた目で見ている、という設定で過ごしていた。本当は、わたしは空気で、土俵にすら上がれていないということを自覚していたけれど。もう一人、その宴会に参加していない女の子がいた。でも、その子はわたしとは違い、自分の意思でそれを選んでいた。それがるりちゃんだった。

るりちゃんは背が高くて、硬い髪質のセミロングをきゅっとひとつに縛っていた。黒目のふちのくっきりした、全体に少し骨ばった印象のある女の子だった。るりちゃんはわたしと同じく一般職で採用されていたけれど、総合職で採用された男の子たちに物怖じすることもなく、自分の意見をよく話す子だった。グループワークでも個人ワークでもよく目立っていたし、名刺交換のデモンストレーションでは代表してロールプレイをしていた。誰とでもフランクに話するりちゃんのことを自分のグループに入れたがる女の子はいたし、それとなく誘う男の子もいたけれど、るりちゃんは「みんなおやすみー 明日もよろしくね！」と言ってさっさとホテルの自室へ引き上げていた。わたしはそういうるりちゃんをかっこいいな、と思う気持ちと、贅沢な人だな、という気持ちの半々の気持ちで見ていた。その土俵に上がれるのに、上がらないなんて、少し傲慢なんじゃないのかな。いや、上がれるからこそ、上がらないことを選択できるのだろうな、じゃあやっぱり、贅沢な人だな、と、そんなことを思っていた。

「かわいい名前だね」と言っているのがるりちゃんだと気付いて、わたしはどきどきした。るりちゃんはわたしのネームプレートを見ながら「よろしくね、丸山芽衣子さん。羽田るりです」と続けた。五日間ある研修のうち、最後のペアワークで隣の席になったのがるりちゃんだった。最後のワークは【他者から見た自分を知ろう！】というワークで、それぞれが一分間自己紹介をし、それをペアになった人がスマートフォンで撮影する、というものだ

った。るりちゃんの撮影してくれたわたしの自己紹介は、緊張で額に張り付いた前髪がしんなりとし、白くてお面のような丸い頬を真っ赤にして、親指の爪を手の甲に食い込ませながら小さな声で「映画を見るのが好きです」と言っていた。

取り込んだばかりのバスタオルは湿気た夏の熱を吸い込んでいる。さっき【まごわやさしい】と言っていた同級生は、今度はInstagramのストーリーズにバーベキューの様子を次々にアップロードしていた。【#夏のはじまり】【#次男急激なギャン泣き】【#Amiちゃんママお手製デザート美味しすぎて感動お店レベル】【#パパたち特製の焼きそばにお行儀よく並ぶ子どもちゃんたちかわゆ】【#ハルさん常に飲み過ぎな件ww】【#次は海水浴で会おうねみんな】【#夏はこれから】【#夏満喫】フラッシュ映像みたいに短い動画を次々と繋げたストーリーズは二十四時間で消えてしまうから、なんとなく心安いと思った。永久に誰かの胸に残るものは、ほんとうは写真にも動画にも残せないもので、だけどこういう写真とか映像に残されたものが、それぞれの目や耳や鼻や皮膚や骨や心を通過して、濾過されたり凝縮されたりして、そして胸の中に堆積していくのだろう、と思う。画面いっぱいに映し出された大きな鉄板では、焼きそばが仕上がっている。みんなが酔いの回った頭で、その楽しさに少し倦みはじめるころ、お酒がそのまま汗になって次々にアルコールを蒸発させているみたいな、頭にタオルを巻いたみたいな男の人が、だいたい焼きそばを作る。めん、もやし、豚肉、キャベツを塩コショウとソースだけで炒めたシンプルな味付けの焼きそばを。ちっとも食欲が湧かなかった。映像を見ているだけで、じくじくと砂の入ったサンダルの感覚とか、脛やふくらはぎにチリチリとあたる雑草の感覚が呼び起こされた。ZIMAの瓶とか、ふにゃふにゃした頼りない簡易椅子とか、紙皿と割り箸とか、夏を満喫しないと犯罪みたいな空気とか、そういうものを想起させた。胸がざらざらの何かで埋め尽くされるのに、これを見続けてしまうのはやっぱり、少しの自傷行為が日々の刺激になるくらい、わたしの日常が平凡だということなのかもしれない。だけどわたしはやっぱり、ここにいる誰のことも好きではなくて、死体みたいにこの部屋で生きていることに心から安堵していた。夕立は上がって、おもての空気は澄んでいた。夕立は、空気に消しゴムをかけてくれる。

こんなに暑い夏の午後、間山はたっぷりと寝汗をかいてよく昼寝をした。間山は背中から丸ごとわたしを抱えて、そのままわたしの頭頂部に鼻をこすりつけて眠った。こうすると落ち着く、と目を閉じて、満ち足りたみたいな口ぶりだった。アレルギー体質だった間山は熟睡しているとき、よく目をこする癖があった。睡眠中の無意識下では力を加減することができず、あまりに強く目をこするものだから、わたしはいつも心配になって薄目をあけ、間山の腕の中からそうっと様子を窺っていた。わたしが頭を乗せていないほうの間山の手は、違う人間のもののように荒々しく目の上で暴れた。わたしはその様子がとてもこわくて、しまいには我慢できずに、間山の手を押さえつけてしまう。いつも繋いでくれていた手、わたしの乳房をまるく撫でる手、頬を両側から挟む手。間山の指をしゃぶったり、舐めたりするの

が好きだった。指の先はニコチンの味がして、タバコを吸ったことがなかったわたしは、ほんの少し、悪いことをしているような気持ちがした。思い出せる手、そのどれもが優しくて、乱暴に目をこする睡眠中の手とは、とても同じものだとは思えなかった。いま穿いているこのショートパンツは、あの昼寝をしていたいつかの午後から、何度も何度も、洗濯をした。

月曜日。出社すると、印刷物の添付ファイルがたくさんついたメールが所長から届いていて、午後までにそれを七十部印刷するように、と添えられていた。そうなるとホチキスの芯がたくさん必要だな、と思って備品室をのぞきに行った。ホチキスの芯を一度に持ち出すのは、一人一箱という貼り紙がしてあるけれど、わたしはいつも三箱それを持ち出す。そして自席に戻ると、三つともそれを取り出し、紙の外箱を捨て、ずっと昔にホワイトデーのお返しで部署一同からもらったチップとデールのキャラメルの空き缶にそれを全て入れた。三箱分の銀色の芯は小さな山になり、そうそうなくなるものか、という決意を感じさせる。もう仕事を辞めてしまおうかなと思う時期も、そうでもない時期も「この芯の山がなくなるまでは仕事を続けよう」という気持ちになるためだけにそれをしていた。入社当時からずっと続けているこの意味の分からないジンクスのことは、誰にも話さなかった。山は、なくなる前に補充する。何度も何度も、何度も、交換し続けている。そうしてこうして、ここまでなんとかやってきた。そしてこれからも、きっと。これは自分だけの、自分を守る、大切なおまじない。

ぶうん、と窓際に置いた空気清浄機が腕を奮わせるような音を立てた。午前中は資料を印刷してホチキスで留めて、あとは少しだけメールを読んだりFAXにハンコを捺すだけで終わってしまった。町中の小さなクリニックや診療所はたっぷり夏休みを取るところが多いので必然的に注文数は減るし、暇だなあ、と残り四分のお昼休みを、窓から外を見ながら思った。しゅわしゅわ、しゅわしゅわ、と忙しなく鳴く蝉の音、トラックが荷台を揺らす音、宅配バイクの焦れた音、学生たちのからからと笑う音、近所の主婦たちの周波数の重なる噂話の音、町の音が窓を隔ててほんの少し漏れ聞こえる。からっぽのお弁当箱を巾着にしまい、いつも持ち歩いているウェットティッシュで口元をぬぐう。毎朝、全員分淹れてボトルで冷やしている麦茶をマグカップに注いでひとくち飲む。ふりかけは、ゆかりかのりたま、たまに鮭フレーク。冷凍食品を詰めるだけの簡単なお弁当は、美味しくも不味くもない。会議室兼休憩室のガラス越しに見える事務所には、カーネルサンダースみたいな白髪の所長と、ケチで有名な営業マンが座っている。出張に行ってお土産を買って来たことがないのはあの人だけよ、感謝っていうものがあの人にはないのかしらね、常識知らずというか、マナーがなっていないというか、と大きな口にベタベタとコーラルピンクの口紅を塗りつけた東洲斎写楽の絵みたいな、目元にインパクトのある先輩社員が言っていた。

新入社員研修のあと、わたしが配属されたのは本社から少し離れた、地方都市の小さなこの営業所だった。営業マンが五名、わたしと東洲斎写楽先輩、カーネルサンダース所長のこぢんまりとしたビルの一階の、ワンフロアだけの事務所だった。色々な人と会話をしたり、毎日違う人と会ったり、目が回るほど忙しかったり、大きな音がしたり強い匂いがしたり日々のリズムが一定でなかったり、そういうことすべてが苦手だったので、少し田舎で、でもそれなりに便利で、静かに自分のペースで働けるこの環境を、わたしは気に入っていた。るりちゃんは、新入社員研修後、本社へと配属された。たくさんいる同期の顔と名前を全く覚えられないまま散り散りになり、それから一度も会わないまま辞めていったり、結婚して名前が変わったり、産休と育休を繰り返しすぎて入社年数のほぼ半分を休んでいたり、誰が同期なのかほとんど分からないままのわたしにとって、最後のワークで一緒になり、連絡先を交換したるりちゃんは特別な存在だった。配属時こそ一般職だったけれど、新規立ち上げプロジェクトの中で唯一の女性として選抜されたるりちゃんの噂は、離れた営業所にいるわたしの耳にも届いた。だけどそれは決して良い噂だけではなくて、なまいきだとか、女のくせにとか、そういうような噂もたくさん聞こえてきていて、そしてるりちゃん自身も、そういう自分の噂については分かっているようだった。わきまえられない私が悪いんだろうね、と、いつだったかるりちゃんはさびしそうな顔で笑った。

来客時に女子社員がお茶を淹れて、急須と湯飲みと茶托を洗う、というのが何十年も変わらない慣習だった。しかし、一部の海外からの来客がそれについて揶揄したり、衛生面の問題で飲みたくないという人がいることもまた事実だった。そこでるりちゃんは、社員ならば誰でもカードをかざすだけで飲むことのできるペットボトルのお茶を、来客を受け持つ本人が、男性も女性も、若手も重役も関係なく、それを自ら手渡すことを提案した。それが色々な人の手や決裁や相談や噂や悪意や賞賛を経て、正式に採用されることになった。るりちゃんのことを慕う後輩もいたし、可愛がる先輩もいたけれど、だけど、るりちゃんのことを良く思わない人も随分多くいた。るりちゃんは人の嫌がることを率先して自分から名乗り出たし、誰よりも自分が一番よく働いた。朝も早くて夜も遅くて、電話にはワンコールで出るし、メールだって常に即レスだった。見積書だってすぐに出すし、どんなに朝早くてもハンドキャリーを断らなかった。それでも、るりちゃんに対する評価は、るりちゃんに掛かる負荷に対して、妥当だとは言えなかった。

よく働くるりちゃんは、自分のしたい仕事のために、自分のしたくない仕事をその何倍も何倍もこなして、明らかに都合のいい人材として扱われているようにもわたしからは見えた。だから本当は、悪い噂になっているようなことのほとんどは否定しようと思えばできることだったのだけれど、でもわたしは、肯定も否定もしなかった。お茶くらい、別に女子社員が淹れたらいいのになあ、と思っていたし、汚くて飲みたくないと思う人は喉が渇いたまま商談をすればいいし、まあ、洗うのはめんどうだけど、と思っていた。それに、営業所には、カードをかざすだけで飲むことのできる自動販売機なんてなかったし。

間山が入社してきたのはわたしたちが入社して三年目の頃だった。春ではなくて、秋でもなくて、なんだかとても中途半端な季節に入社してきた。新入社員ではなく、だけど即戦力というキャリア採用というわけでもなく、いわゆる縁故入社だった。彼は名前を書いてお金を払えば卒業できるような無名の大学を卒業後、二年もの間、公務員試験を目指すという名目で、ぶらぶらとダラダラと無為な日々を送っていたようだった。彼の叔父が精密機器の部品をつくる会社を経営していて、うちの所長と知り合いだった。「今は営業マンは足りているんだけどねえ」とやんわりと断る所長を押し切り、だったら部品の供給を止めてもいいんだけど、と冗談にもならないような脅迫と引き換えに入社してきたのが間山だった。ものすごく日灼けをしていて、ムスクみたいな香水をつけて、声の大きな、筋肉質の、体格のいい大学生みたいな人だった。勉強はできなかったけれど、学生時代に良いことも悪いことも一通り済ませてきたような人だった。英語を使う海外メーカーとの取引や、回転の早い頭を持つ医師と商談を詰める現場はほとんど本社が取り仕切っていた。営業所で管轄していたのは、彼の元気やノリの良さ、フットワークの軽さを存分に活かすことができるような現場ばかりだった。

間山が営業所にいたあの頃は、みんなでよく飲みにも行っていた。行くのはいつも、近くの台湾料理屋で、ニンニクの汁に漬けたしじみとか、分厚い卵焼きとか、そういうものを食べながらみんなよく笑った。工事会社のおじさんとか、配線作業をしてくれたお兄さんとか、物流倉庫の事務員さんとか、そういう人たちも一緒に、みんなでよく食べたり飲んだりした。台湾料理屋で、ピータンを前に静かにみんなの話を聞いていると、間山が急に隣に座った。「連絡先、交換しましょうよ」と何でもないふうに彼は言った。電子タバコじゃなくて、紙巻タバコに火をつけながら、言った。ムスクの香りと、隣にいるだけなのに皮膚から発せられる熱が、ひどくこわくて、動揺した。

火曜日。朝一番で本社の総務部の人が来ていた。

目が合って会釈をすると「ああ、お久しぶりです」と全く懐かしくもなさそうに総務部の人に言われて、ああ、今日はパソコンの入れ替えの日か、と思い出した。Windows のアップグレードがどうとかこうとか総務部の人は言っていて、なんだかよくわからないけれど、いま使っているパソコンはものすごく立ち上がりが遅くて、エクセルの画面もすぐに固まってしまうから、入れ替えてもらえるのならばラッキーだなと待っていると、総務部の人は営業マンの分のノートパソコンをテキパキと入れ替えて、それで帰ってしまった。所長に聞いてみると「芽衣子さんのパソコンはまだ動くでしょう、ほら、だって、デスクトップパソコンじゃない、それで、持ち出したりしないでしょう、だからまあノートパソコンの彼らが優先だから、まあ、また今度ねえ、予算が余ったらねえ」と言われて、なるほど、まあ、確かにまだ動くか、と思って、デスクトップパソコンだから大丈夫というのは少し意味不明だなと思ったけれど、総務部の人に出したお茶の急須と湯飲みと茶托を洗いに給湯室へ立とうとした。椅子のキャスターは相変わらず動きが悪くて、思わずホチキスの芯の山を指で

撫でた。この間、山を積み上げたところだから、まだたくさんそれはあって、仕方ないなと給湯室へ向かった。

間山は、わたしの知らないことをたくさん知っていた。アボカドの種の取り方とか、オービスの死角とか、くだらない都市伝説とか、砂浜にテントを建てる方法とか、ワインから抜けなくなったコルクの抜き方とか。知らなくても死なないことを、たくさん教えてくれた。わたしはいつもそれを横で、静かに聞いているのがうれしかった。「芽衣子はなんにも知らないんだな」と間山が得意げに言って、髪の毛に触ってもらうことは、なんだか守られているようでこそばゆい恍惚に襲われた。間山にそう言われると、本当にわたしは自分が今までなんにも知らなかったのかもしれないな、という気がした。どうやってここまで生きてきたのだろうかと思うほど、なんにも知らなかった。うれしいことも、恥ずかしいことも、気持ちのいいことも、なんにも。知らないことは間山を喜ばせた。だから、これでいいのだと思った。

あの夏の日、食べていたのは、毒々しいくらいに赤いイチゴのアイスキャンディだった。ベランダの柵にひじをついて外を眺める。夜気はなまぬるく、アイスキャンディはあっというまに溶けはじめる。それはわたしの指から手をつたって白い腕に赤い筋をつくる。間山のタバコはほんの少し甘い香りがする。外国製だからなのだろうか。芽衣子、アイス溶けてるよ。うん、外で食べるとだめだね、手を洗ってくる。洗わなくていいよ、と間山が笑う。貸してみ、とわたしからアイスキャンディを奪った間山は、自分の手に赤い筋をつけながらわたしの腕を舐めた。腕を舐めて、指を舐めたあと、アイスキャンディをわたしの鎖骨に沿わせる。なに、つめたいよ、とか、やめて、とわたしは言えず、ただベランダから白い街灯に照らされた駐車場のアスファルトを見ていた。つめたいそれは、焼くような感覚を伴いながら皮膚の上を滑った。アイスキャンディの赤い汁を鎖骨の窪みに溜めて、それを間山はうしろから舐めとる。ゆっくりと動く赤い舌は、駐車場の街灯に照らされて、赤い汁をどんどん奪っていく。吸いかけのタバコはほとんど灰になっていた。駐車場のアスファルトは、日中、存分に吸い込んだ太陽の熱を抱えて、それでもそんなことは分からないように涼しい顔をしてそこにいる。骨と皮膚に這う舌の熱と、なまぬるい夏の夜が撫でるべたべたのからだと心と、イチゴとタバコのわざとらしい甘さは、こすっても引っ掻いても落ちない呪いだった。

るりちゃんはその頃にはすっかり社内の色々な試験をパスして、社外の資格を取ったりもして、総合職として働き、着実にキャリアを積み重ねていった。間山は、自分たちが付き合っていることは絶対に誰にも言ってはいけないと言って、わたしは少しさみしいと思ったけれど、そういうものか、と思って、わかった、と言った。営業所の中ではもちろん、定期的に連絡を取り合うるりちゃんにも言わなかった。だから仕方のないことなのだけれど、営業所にたまに立ち寄り、間山と数回言葉を交わしたるりちゃんは、彼のことをあまりよく

言わなかった。るりちゃんのよくないところでもあるような気がするけれど、るりちゃんは明らかに間山をバカにしていた。ああ、縁故入社の大学生ね、と鼻で笑う。知識にも経験にも論理にも基づかない、勢いだけで乗り切ろうとする彼の営業スタンスを、心底バカにしていた。「間山くんさ、ドクターと話すときに、その居酒屋の元気な大学生アルバイトみたいな口の利き方しないでね」と冗談めかして言うるりちゃんの目は、全く笑っていなかった。るりちゃんの方が、ずっとずっと勉強していたし、努力していた。資格も知識も比べられないほどだった。だけど、中途採用の間山があっという間にるりちゃんと同じ職能資格に昇格したのがきっと悔しかったのだろうなと思う。「女の子なのに」ここまで昇格できたことを感謝しろと上司に言われたとるりちゃんが話していた。いいよね、間山くんは、人よりたっぷりモラトリアムを満喫して、熾烈な就職活動も経験せず、向上心もないのにいつの間にか同じステージに立っていて、そのうちあっという間に私を追い抜かすんだろうな。私のしている勉強なんて、性別を前にしたら、なんの力にもならないんだもんな、まあ、わきまえないといけないよね。

間山は間山で、るりちゃんのことを「女のくせになんでも知ってる顔してクソなまいきないけ好かないやつ」と口汚く罵っていて、わたしはその時もまた、かばわなかったし、どこかで少し安心していた。そうだよね、るりちゃんが身の丈にあったものを望んでいないんだよね、とどこかで安心していた。るりちゃんは「女のくせに」と言われてばかりだった。でもそれはきっと、るりちゃんが悪いんだよね。わたしは「女の子だからいいよ」とずっと言われてきた。女の「子」だからと、三十歳を過ぎても言われてきた。重要な仕事をしなくてもいいし、なにひとつキャリアは積み上がらないけれど、差し入れでもらったアイスクリームは最初に選ばせてもらえるし。「女であること」をうまく使えないるりちゃんが悪いんだよ。往生際が悪い、って、言うんだよ、そういうの。

水曜日。ひんやりとした手の甲を、まぶたに押し当てる。

絶対にまだ目をあけたくない。断固として。水曜日はノー残業デーで、別にそんなことをわざわざ推奨されなくても、わたしは年がら年中、定時に退社しているのだけれど。カーテンの隙間から射す光と漏れ出る蝉の合唱は、夏の雫だった。夏を凝縮して、大きなオレンジ色の、ぽってりとした陶器の鍋で煮詰めた、夏の雫。あのオレンジ色のぽってりとした陶器の鍋は、どこで見たんだっけ。ああ、そうか、いつだったかの誰だったかの結婚祝いをするからと集金された時に見たカタログの鍋か。重たそうな鍋だったな。あれはきっと、夏を煮詰めるのにちょうどいい。

どうして夏は、律儀に毎年やってくるのだろう。夏は、夏が楽しい人のところにだけやってくればいいのに。そしてもっと厄介なことに、こんなわたしですら、この夏の雫に、少し心が踊りそうになる。なんにもないのに。今年だってきっと、去年も、来年も、きっと。な

んにもない、なんにも持っていない。だけど、自分でつくった、自分で見つけた、この自分の生活を、わたしは結構いいと思っていた。誰に見せるでも、褒めてもらうでもないけれど、自分だけの、大切な生活を、いいものだと思っていた。朝起きて、覚醒と睡眠のはざまの、ぶよぶよとした頭のまま、自分のためだけに珈琲を淹れる。街に出たとき、木の壁の印象的な輸入食品などを取り扱う珈琲店に行くのを楽しみにしていた。先週、店員さんに勧められてアイスコーヒー用の豆を買った。その場で挽いてもらって、袋を密閉してもらう。胸に抱くとまだホカホカしたその袋を持ち帰るのは、とても贅沢な気持ちがした。そして、それを毎朝一杯分だけ濃くハンドドリップする。グラスに山盛りの氷の上から、少しずつ少しずつ滴らせて、ぐるぐるとかき混ぜ、アイスコーヒーにする。きりりと引き締まった苦味の強い珈琲は、驚くほど夏の朝にぴったりで、指の先までうれしさが循環するようだった。ペットボトルとも、缶とも全然違うそのアイスコーヒーは、自分が、自分で作り出した確実で揺るがない幸せの一片だと思った。

るりちゃんは営業所に来るとき、いつも見たことのないようなお菓子を持ってきてくれる。お客さんのところへ持っていくからいろいろ調べておきたいの、と言って「ねえこれ、きっと芽衣子さん、好きだと思うよ」と手渡してくれるお菓子は、確かにいつも、本当にわたしが嬉しいと思うものばかりだった。甘く煮詰めたクルミをヌガーにして固いクッキーで挟んだものとか、シャインマスカットを白餡と求肥で包んでお砂糖をまぶしたものとか、チェダーチーズの中に燻した魚卵を散りばめて一口サイズに切ったものとか、触れるだけで断面がふるふると動くスフレカステラとか、そういう見たことのないお菓子だった。わたしは、上等なお菓子は信玄餅とモロゾフのプリンしか知らなくて、あとはじゃがりことかコアラのマーチが美味しいと思っていた。るりちゃんのくれるお菓子はいつも完璧に素敵でおしゃれで美味しくて、夢みたいにきらきらしていた。だけど、なんだか少し、胃もたれがしてしまった。

汗をかいた背中に、ぺっとりとタンクトップが張り付く。部屋着を出すのも億劫で、ショーツとタンクトップのまま眠った昨日。冷えは女性の大敵、だけれども。てろてろしたタンクトップはめくれ上がり、へその穴はしょんぼりとうなだれていた。へその穴まで、持ち主に似るのだろうか。ブチ猫色のパイプベッドがぎい、と鳴るのを合図に、持ち主のわたしものろのろと起き上がる。横になっていたい。会社になんて永遠に行きたくない。毎朝毎朝、同じことを考えて、休みたいなあと逡巡して、そういう生活をするためにはどのくらい貯金があればできるのだろうか、宝くじを買えばいいのだろうか、それともお金持ちに見初められればいいのだろうか。見初められるってなんだろう、見つけてもらうって、どうするんだろう。とりあえず今日の占いだけは見よう、とスマートフォンで水瓶座の運勢を見て、もう一度目を閉じたり、冷えたおへそを撫でてみたりして、それで結局会社を休んだことなんてないのだけれど、それでも毎朝、同じことを考える。

シャワーを浴びて、肩の上くらいで切りっぱなしにした髪をざぶざぶと洗うとようやく目が覚めた。「芽衣子の匂いだ」と間山が、わたしの小さな乳房を歯型がつかないくらいの強さで噛みながら言ったオリーブ蜂蜜のボディーソープは、既に十年以上使っていたし、ボトルに半分以上残っていたけれど、間山にそういうことを言われた日、どうしてもそれを棄てたくなって、洗い場に流して棄てた。とぷとぷと流れる琥珀色のその液体は、浴場にある小さな窓から射し込む夏の朝の陽光を反射する。向こうが透けて見えて、きれいだった。僅かに香ったオリーブは、路地裏のイタリアンレストランの香りがしたし、水で流したあとに残った蜂蜜の香りは、小学生の頃の朝ごはんだ、と思った。朝ごはんを食べるのが好きじゃなかった。母は、毎朝薄く、カリカリに焼いたトーストに蜂蜜をぬり伸ばして、食べなさい、と言った。母とハニートーストのことなんて、どうして急に思い出したりしたのだろう。わたしと間山にも確かにあった、あの蜜月期ですら、わたしは自分の欠片を相手に残すことがこわかった。自分の何かを相手に残してしまうことは、必ず訪れる別れを意識することと同じだと、あの時のわたしには思えたのだった。それは今となっては、少しくらい残してもよかった欠片だったというのに。

匂いは人に、記憶を喚び起こさせる。わたしの匂いなんて、この世になくていい。間山のムスクの匂いや、紙巻きタバコの匂いや、車の中の変なお香の匂いは、さっきのことみたいに思い出せた。からっぽの体の中にあるのは、もう息を吹き返すことのない恋心と、萎びた感情だけだった。新しいタンクトップとショーツを身につけて、ぺたりと床に座る。カーテンの隙間から射す太陽に当たらないように、無意識に光を避ける。間山はわたしの、日に灼けていない、筋肉の鍛えられた造形の美しい体とは程遠い、ふやふやしたカラダを褒めてくれた。「しろくてつめたくて、きもちいい」とわたしの内腿に肌を寄せた時の、間山のひげそりあとの感触まではっきりと思い出せる。ブチ猫のベッド脇に、クリーム色のやわらかい革製の通勤カバンが倒れている。そこからはみ出す小さな丸い包みは、所長が出張のお土産に買ってきた饅頭で、東洲斎写楽先輩が配ってくれたものだった。うすっぺらい白と橙のビニル包みだった。饅頭に手を伸ばしたはずみで冷蔵庫まで膝頭を使って歩く。膝立ちになったままぼそぼその饅頭を、つめたい牛乳で流し込んだ。外からは早起きの子供の声がする。夏を信じきっている、子供の声だった。

し水曜日だけはランチを外で食べましょう、と東洲斎写楽先輩が言うので、水曜日はお弁当を持って来ない。外食といっても選択肢は限られていて、だから今日も珍しくもない近くの中華料理店で、半チャーハンとエビチリがメインのレディースセットを食べていた。暑くて、胃にもたれるなあと思っていたら、ずっと何かを話している東洲斎写楽先輩が急にわたしの半チャーハンの皿に自分のチャーシュー麺のチャーシューを乗せ「ほら、あげるわよ、うれしいでしょ、食べなさい」とこっちを見ていた。欲しくないなあと思いながら「ああ、

ありがとうございます」と箸先でその肉片を少しつついたとき、いつも静寂を保っているわたしのスマートフォンが、ぶうん、ぶうん、と短く二回震えた。ロック画面には、結婚退職したかつての同期からのグループメッセージが表示されていた。

【週末、間山くんとるりちゃんの二次会いく人ー？】
【時間ある人、久しぶりにお茶しようよー】
【めっちゃ楽しみー】
【るりちゃん、当日まで働いてそう笑】

グループトークに届いた、他意も悪意も孕まないメッセージは、それでも、やっぱり、とてもわたしを動揺させた。過去に間山と付き合っていたことを誰にも言ってはいけなかった、だから、誰も知らない。それに、もうずっと前のことだった。もうずいぶん経つ。二人が籍を入れるというのは、梅雨入りしてすぐの頃、所長から聞いて知っていた。

こういう報せを、身近な誰かから受ける日が来ること、客観的事実として、揺るぎのない事実として、目の前に突きつけられる日が来ることは、ずっと分かっていた。それでも、実際にそれが起きてしまうまでは、ずっと行き場のない気持ちのままでいられた。あれは本当に、幼い恋だった。分かっていた、選ばれなかった、わたしではなかった。未練があるのとも違った。ただ、自由に想っていられることだけを拠り所にしていた。静かに、誰に責められるでもなく、思う存分思い出に浸って、音とか匂いとか、空気とかを、何度だって咀嚼して吐き出して、また飲み込んで、ずっと反芻していられた。時が止まってしまったみたいな部屋の中で、煮詰め過ぎて腐敗してしまった記憶の充満した部屋の中でただ一人、一人では進められない駒は、ずっとここにあるままだった。それで、もうそれはずいぶん長い間、ずっとそのままだった。

結婚するのだと思っていた。わたしは浅はかだったから、そう思っていた。お互いに、ひとときも離れていられない、という蜜月期を越えても、わたしたちはそれなりに仲良くやっていたように思う。それでも、あっというまに間山はいなくなった。間山は入社して一年半ほど経ったころ、本社へ転勤になった。営業所と本社はそんなに離れているわけではなかったし、そんなことはちっとも障害になるとは思わなかった。だけど、その頃から、目には見えないけれど確実な別れの予兆は、わたしたちの頼りない絆を蝕んでいった。でもその片鱗を認識してしまえば、正式な別れ話をしないといけないような気がして、それにずっと気がつかないふりをしていた。冷たくされることも、興味を失われた相槌も、不誠実な対応も、何もかも、そんなものはないように過ごしていた。億劫そうに触れられた体は、気持ちとは裏腹に間山を拒んでいた。触れられたくないと、気持ちのない人から触れられたくないと、自分を大切にしろと、自分の体に自分が言われているようだった。「芽衣子はなんにも知らないんだな」と言われていた頃のわたしでい続けようと思った。ずっとずっと、何も知ら

ないままでいたかった。もうだめなんだと思う日と、まだやっていけるじゃないかと思う日が、かわるがわるやって来て、それがいつしか片方だけになってしまった。

明らかなる二人の関係の変化に対して鈍感に振る舞うわたしにも、間山はきっとますますうんざりしていたのだろう。わたしには、その心変わりや別れと正面から対峙できるほどの勇気も自信もなくて、ただ、いつしか必ず訪れるその日に、心の底から怯えていた。のらりくらりと大事な局面をかわし続けるわたしと、早く決着をつけてしまいたい間山は、もう正常な恋人関係を楽しめる間柄ではなかった。最後の数ヶ月は、交際期間にふくめることもできないくらい、お互いがお互いを傷つけるだけの期間だった。捨てられたくない、と媚びてばかりの毎日に、自分が一番自分に絶望していた。一緒にいない時の方がずっと気持ちが軽いのに、一緒にいない時間を過ごすことの恐怖はいつもそれを上回った。「はなれたくない」といつも以上に甘えて縋りついたわたしに「もう解放してほしい」のような短いメッセージを返し、それきりだった。あっけない最後だった。嵐のように思えた期間も、実際は自分の中だけで起きていることだった。東洲斎写楽先輩は相変わらずおかずを一品くれるし、所長は相変わらずあご髭をさすりながら扇風機に当たっていたし、るりちゃんは相変わらず物語の主人公のように、正当な不公平と闘っていた。誰にも言ってはいけない、と言われていたことを最後まで守った。だから、悲しみもさみしさも、たった一人で背負わなければいけなかった。怯えていた出来事というものは、絶対に起きて欲しくないと祈るのと同じくらいの強さで、早くそれを済ませてしまいたい、という気持ちにもなる。ただこれさえ過ぎ去れば、ただこれさえ起きてしまえば、いつかを想像してもうこわくなる必要もないのだから。だから、すべてが終わったとき、少しホッとしたことを覚えている。

誰にも知られないところで失恋をした。それでも、いつまでも傷ついていることは罪悪に思えて、満足に打ちひしがれることもできなかった。引きずっているのはわたしだけで、心苦しいのもわたしだけで、思い出が息詰まるのも、一緒に歩いた駐車場を通るのが苦痛なのも、全部わたしだけだった。会いたかった、とてもとても、会いたかった。それ以外に何もなかった。それで、こんなことはなんでもないことなんだよ、と言って、一緒に笑って安心したかった。わたしは今も、なんにも知らないままのわたしでいるんだよ。相手の中に自分の欠片が何一つ残っていないという事実も、相手の行く先にほんの少しの影も自分がいないことも、ちゃんと分かっていた。飲み込もうと思った。自分たちだけに起きた魔法みたいに思えたわたしたちの時間も、そこらじゅう掃いて捨てるほどもある、ただの出会いと別れでしかなかった。特別だなんて、運命だなんて、どうして少しも疑わずに信じられたりしたのだろう。でも、それも、もう過去のことだった。全て、遠い、過去のことだった。

ランチから戻ると、扉を開ける前から所長の大きな笑い声が聞こえた。会議室兼休憩室からは、所長の機嫌の良さそうな声と、間山の声がした。「あら、間山くんの声、久しぶりね」と東洲斎写楽先輩がうれしそうな声で言ったので、無視した。間山は自分の得になる人を嗅

ぎ分けて媚びるのが上手で、だから東洲斎写楽先輩のことをいつもおだてては好き勝手雑用を頼んでいて、そういうところを嫌だなと思っていた。事務所からガラス越しに見える間山は相変わらず日に灼けていて、左手の薬指にはめられた指輪とのコントラストがとてもはっきりして見えた。最近はああいう輪郭のしっかりした結婚指輪がトレンドなのかな。間山はるりちゃんと付き合い始めたとき、それをすぐに公表した。すごく誇らしそうだったし、自慢げだった。あんなになまいきだって、言っていたのに。「芽衣子はなにも知らなくてかわいい」と、言っていたのに。るりちゃんとはほんの半年も経たないうちに結婚を決めてしまった。「もうずっと、何年も彼女がいなかったので、久しぶりにできた彼女がるりちゃんで幸せです」と、みんなの前で、照れくさそうに言っていた。あのとき、香りを棄てなければ、せめて記憶には残してもらえたのだろうか。それともやっぱり、なかったことになることには変わりなかったのだろうか。

所長と楽しげに会話しながら二人は会議室兼休憩室から出てきた。事務所の中にいる数名の営業マンにそれぞれ声を掛けられたり、おめでとうとか久しぶりだなとか、元気でやってんのかよとかおかげさまっすとか、そういうことを言いながらしばらく間山は営業所にいた。キャスターの動きの相変わらずにぶい椅子に座って、立ち上がりの遅いデスクトップパソコンのスリープを解除して、視界の端にいる間山に気付きながら、無意識にわたしの左手はホチキスの芯の山をそっと撫でた。東洲斎写楽先輩はいつの間にか塗り直したコーラルピンクの口紅のついた唇をぱくぱくとさせて間山の二の腕に何度も触れていた。「先輩みたいになんでも先回りして助けてくれる人が今は近くにいなくて何でも自分でしなきゃで大変ですよ」と言っている間山が、まるきり知らない人に見えた。果たしてこんな人とわたしは、寝たり起きたり笑ったり泣いたりしていたのだろうかと、不思議な気持ちでそれを見つめていた。誰だろう、これは。

最後に一緒に食事をした日、いつもはテレビやスマートフォンばかり見ている間山が、どうしてだかわたしのことをずっと見ていたことを今も思い出す。もう別れるのだろうなと分かっていて、それでわざと明るくふるまっていたあの頃が、一番どうにもならなくてしんどかった。「わたしがごはんを食べているのを見るのがそんなに好きなの？」と冗談めかせて聞いてみると、間山は返事をしなかった。曖昧に笑って、とても困った顔をして、黙ってしまった。傷ついているのはいつもわたしの方だと思っていたのに、その困った顔をみると、間山は間山で、その人なりの方法で、傷ついているのだと分かった。勝手にどこかへ行ってしまうなんて、わたしを置いてどこかへ行ってしまうなんて、別れるなんて、理不尽だと思っていたのに、これ以上間山を傷つけたくはないように思えて、いたたまれなくなった。その日、最後にしたセックスも、すごく短くて、力もなくて、キスもしなかった。痛くて、乾いて、棒読みみたいな声さえほとんど出なかった。

木曜日。「芽衣子さん、祝電、打って。間山くん、あさって、土曜日だろ」

所長は、しかし暑いねえ今日も、と言いながら扇風機を自分の方だけに向けて、首振り機能を停止させてそう言った。袱紗や白ネクタイ、薄墨と濃墨の各種筆ペン、ご祝儀お香典用の封筒の入った冠婚葬祭グッズ抽斗へと手を伸ばす。電報の文例集は、わたしが入社した時からずっと同じもので、すっかり紙はかりかりに乾き、薄黄色に変色していた。文例集を開いて、途方に暮れる。わたしが、ふたりに贈りたい言葉が、こんな古びた文例集の中にあるはずがなかった。ふたりのこの先が、どうか幸せでありますようにと、そういう透明な気持ちになれないことが、悲しかった。ざらざらの何かに飲み込まれた心は、それでもほんの少しだけ、高潔でありたいと、今更ながらにそんな気持ちを残していたけれど。

「祝電は、所長のお名前だけでいいですか」とそちらを見ずに尋ねると、昨日通販で買ったスレンダーになれるという触れ込みのTシャツの話をやめてこちらを振り向き「なんでよ、そりゃあ営業所員一同、でしょうよ。るりちゃん、きれいだろうねえ」と親しい親戚の子のことのように愛おしそうに言い、あの子はやっぱりなんというか、華があるからねえ、頭もよくて、仕事にも一生懸命で、本当に間山くんはいい子を選んだよねえ、と付け加えた。

「こっちの、人形付きの祝電でもいいですか、少し高いんですけど」文例集を片手に、インターネットの電報依頼の画面を指差してわたしが言うと、別にいいけど、そんなのるりちゃん好きじゃないでしょうよ、と所長はディスプレイを少し覗いて、訝しがった。

そのクジラをモチーフにした変なキャラクターは、最後に間山と旅行をした夏、パーキングエリアで「これ、なんか、芽衣子が眠たいって言う時に似てるから買ってあげるよ」と言って、プレゼントしてくれたぬいぐるみのキャラクターだった。そのぬいぐるみに向かって「芽衣子、早く寝なさい」と話しかけて「ああ、本物の芽衣子はこっちか」と言って抱きしめてくれたことが、とても楽しくて、こそばゆくて、本当にうれしかった。間山がいるこの世界は無敵だと、わたしにはこわいものなどなにもないと、そんなことを思うほどに、満ち足りていた。

間山がそんなことを覚えているはずがなかった。でも、営業所で祝電を打つような雑用をするのは、いつまでも重要な仕事を任されることのないわたしだということを、るりちゃんの同期であるわたしだということを、万が一、間山が気付いてくれて、それでわたしがこのキャラクターを選んだということを、わたしという存在を、間山が少しでも思い出してくれたらいいのに、とそう思った。思い出すことが何になるわけではなくて、どうにかしたいわけではなくて、ただ誰にも思い出されないまま死んでしまうのは、なんだかとても、あんまりじゃないかと、そう思ったのだった。

結婚式はきっと、とても忙しくて、したことがないから分からないけれど、きっと慌ただしくて、ふたりが家族になる大切な一日で、きっとるりちゃんは綺麗で、本当に本当に綺麗で、みんなからおめでとうと言われて、付き合っていたときからみんなの公認の仲だったふたりは誰からも祝福されて、電報がどんな装丁で届いているのかなんてきっと見ることもないだろうけれど、分かっているけれど。無意識でいいから、ほんの一欠片でいいから、わ

たしと間山の思い出も、視界に入ればいいなと、網膜へ映ればいいなと、そう思った。それで、うちへ帰ったら今日、あのクジラのぬいぐるみを捨てよう。電報になっておめでとうの気持ちと共に行くのなら、さみしくはないだろうから。

金曜日。真っ黒な皮膚の表面を覆う毛穴のひとつひとつが、夏の全てを吸収している。この子は毛穴の全てから、夏を取り込んでいるのだ、きっと。野球のルールは何度聞いてもいまひとつピンとこなくて、それでも高校野球がはじまると、いつもそわそわとした得体の知れない幸福な焦燥感に出会う。今日は会社を休んだ。金曜日で、週終わりの片付けがあったけれど、休もうと思って休んだ。朝起きて、オレンジ色のぽってりとした陶器の鍋を想像しながら、電話をしようと思ったけれど、声を出すのも億劫だったので所長と東洲斎写楽先輩にメールをした。メールの返信が来たらうっとおしいので、すぐにスマートフォンの電源を切った。

子供の頃みていた高校球児たちは、とても精悍な顔つきをした立派なお兄さんだった。いつかわたしも高校生になるのかと、真っ黒に灼けた球児たちを、遠い世界の人を見るような気持ちで眺めていた。自分が球児たちと同じ年齢になっても、やっぱり彼らは立派なお兄さんのままで、人生のほとんどすべてをぼんやり過ごしてきたわたしにとって、とても同じ年数を生きている人たちには見えなかった。

小さい音に設定したテレビに映る球児たちを、焦点の定まらない目で捉え、ベランダから漏れ聞こえる蝉の鳴き声に想いを馳せた。ここに映る球児たち、ではない球児たちのことを思う。同じくらい努力をしたかもしれないし、やっぱり努力が足りなかったのかもしれない。それはわたしには分からない。だけど、ここに映らない、ここに映るより遥かに多くの球児たちが存在していることは事実なのだと思った。みんなそれぞれ、真っ黒に日に灼けて、それぞれの毛穴から、それぞれの夏を取り込む。主役になれなくたって、夏は等しく、みんなに訪れる。インストールされた夏は、彼らみんなのからだの中を駆け巡るのだろう。わたしは、とても時間をかけて、丁寧に掃除機をかけた。つぶつぶと足の裏を刺激する塵がなくなる。フローリング床用のクレンザーを部屋の隅々に噴射させる。濡らしたスポンジでゆっくりと端から磨いてゆく。何区画か磨いたあと、汚れたスポンジを裏返して目をこらすと、くりんとカールしたまつげエクステがついていた。本棚と姿見の間を這いつくばって磨いていると、今度は人差し指の爪を切った時に飛び散った欠片らしきものが落ちていた。その隣には、酔っ払った時に投げ捨てるようにして外したコンタクトレンズが、シワを寄せてぱさぱさに乾いて落ちていた。

こうしてわたしは、手や目や細胞や、血液や体液や、体の色々な部分を少しずつ捨て、脱皮するように少しずつ新しくしながら、そうして生きているのだと気付く。悲しみを悲しみとして、喪失を喪失として認識しなくなるその日まで、どうにかやり過ごして生きる以外に、

上手な方法が見つけられなかった。からだの中の色々なものを捨てることが、それを助けてくれているように、そう思えた。

試合終了を告げるサイレンが鳴る。マウンド上には、夏を駆けた球児たちが、太陽の光を反射した真っ白な雫を浴びて輝いていた。生命力そのもののような球児たちは、とても眩しく、清らかだった。負けたチームの選手は、声を絞り出し、憧れの地の砂を掴み、地面を叩いて泣いた。素直に地面を叩いて泣くことができることが、ほんとうに美しかった。仲間の選手はその背中を右手で優しく撫で、左手で自身の目を思うさまこする。そして、歯を食いしばって泣いた。あの瞳から溢れ出たのも、夏の雫。この先ずっと、きれいなものだけがあの瞳に映ればいいなと思う。わたしの半分くらいしか生きていない彼らは、やっぱり今日も【立派なお兄さんたち】だった。

いつ頃だっただろうか。梅雨があけるかあけないか、まだ蝉は鳴いたりしていなかった頃だったと思う。思い返せば、単なるマリッジブルーの一種だったのかもしれない。るりちゃんがある夜中、本当に支離滅裂としか言えないメッセージを送ってきたことがあった。報告書もプレゼン資料もいつも完璧なるりちゃんが、てにをはすらチグハグな、全く日本語になっていないメッセージを送ってきた。酔っ払っているのかとも思ったけれど、でも単純にそういうものでもなさそうだった。苦しみとかさみしさとか、焦りとか怒りとかがない交ぜになった感情の空気砲のようなメッセージだった。いつもなんでもできるるりちゃんにはあるまじき行動で、でも、死にはしないだろう、とわたしは冷静に思った。朝には謝罪のメッセージが届くだろう、と。だからそのまま寝た。予想通り、翌朝るりちゃんからは謝罪のメッセージがいくつか届いていて、返事をしようかとスマートフォンを眺めているところで着信があった。「芽衣子さん、ごめん」と呟くるりちゃんの声は、いつものようだったし、いつもより少し疲れているようでもあった。「夕方に、本社の近くのスタバで待ってるよ」とわたしが言うと「スタバじゃなくて、人のいないところに行きたい」とるりちゃんは小さい声で、自分を落ち着かせるように言った。

るりちゃんが、青地に白色の文字と猫が印字された診察券の小さなクリニックへ通っていることを、その時初めて知った。そのクリニックは女性の医師が一人で診療をしているクリニックで、夜遅くなっても診てもらえるところと、辛抱強く話を聞いてくれるけれど妙に慰めたり甘えた声で励ましたりしないところが気に入っている、とるりちゃんは言った。私は先生に信頼されているから、範囲内でならば余裕を持って薬を処方してもらえるの、と話すときは、ほとんどうっとりしたような表情で、少し誇らしそうですらあった。そして昨夜は、銀色のシートに緑色の文字で薬剤名が刻印されている錠剤を「うっかり」規定量の三倍、白ワインで飲んでしまったのだと言った。こんなことは二度としない、絶対にしない、今までだってしたいと思ったことはないし、自分が何故そんなことをしてしまったのか分

からないし何も覚えていない、とるりちゃんは言い訳するような口調で何度も言った。別にどこかが悪いわけじゃないの、頭がおかしいとかそういうことじゃないの、少し眠りづらいとか、疲れが溜まっているとか、そのくらいのことなの。些細なことなの。誰にでもあるようなことなの、とるりちゃんは言ったけれど、そのあと結局泣いてしまった。黒目と白目の境目がはっきりしたるりちゃんの目からはあとからあとから涙が出てきた。

「間山くんには言わないで」と言ったるりちゃんは、何か色々なことを諦めているように見えた。嫌われたくないから言わないで欲しいんじゃないの、ただただ間山くんとこういう話をするのが億劫で仕方がないの、自分の本当の部分を、弱くてだめなどうしようもない部分を話したいと、甘えたいと、微塵も思えなくて、そういう人だから結婚するの。るりちゃん、大丈夫だよ、それに、なんか分かるよ。間山は頭が悪いから、騙すのなんて簡単だよ。るりちゃんがこっそり錠剤を飲まないと眠れないことも、喉にゴムの蓋で栓をしたみたいにときどき呼吸ができなくなることも、オフィス街のクリニックに通っていることも、見えない何かと闘っていることも、きっとなんにも気付いたりしない。間山はきっと、自分の見たいようにしかるりちゃんを見ていないから。それに、るりちゃんもきっと、見られたい自分のままでいるから、だからふたりは成立しているんだよね。どうしたの、とか、大丈夫だよ、とか、そういうことをわたしは言わなかった。言ったってどうしようもできないことだと思ったから、言わなかった。るりちゃんの悪い噂を否定しなかったし、るりちゃんが見えないところでがんばっていることをわたしは全然誰にも言ったりしなくて、ずるいかな、とも思っていた。でもね、るりちゃん、自分の生活は、自分でよくしていかなきゃいけないんだよ。「結構いい」って、自分で思えるようにしていかなきゃいけないんだよ。だから、言わない。

酩酊状態になったとき、お酒や薬でわけがわからなくなったとき、無意識の中で助けを求められる相手が間山ではなかったんだよね。るりちゃんは、結婚する人に、それを言えるようにならなくちゃいけないのに。それで、そうじゃないからるりちゃんはるりちゃんなんだと思った。るりちゃん、人はね、全方向に完璧でいることなんてできないんだよ、そんなことをしたら壊れてしまうんだよ。るりちゃんは頭がおかしいわけではないというけれど、でも少しはおかしいと思うよ。間山に、るりちゃんは救えない。救えないから一緒にいるんだよね、きっと。

るりちゃんには何も言ってあげられないし、肩や手をさするのもどこか違う気がして、カバンの中をごそごそと探ると、いちごポッキーとアーモンドポッキーの小袋がひとつずつ入っていた。昼間に東洲斎写楽先輩がくれたものだった。いちごポッキーの方を、だからるりちゃんにあげた。るりちゃんはポッキーの小袋を見ると、もっともっと泣いて、ごめんとかありがとうとか、そういうようなことを言ったけれど、そのるりちゃんを置いてわたしはスターバックスを出た。いちごポッキーをあげたのはただアーモンドと比べてそっちが好きじゃなかったからだし、それにいちごポッキーの方が溶けていたからだった。るりちゃんは人のいないところで話したいと言ったけれど、わたしは期間限定のフラペチーノが飲み

たかったから、スターバックスに来られてよかったなあと思った。

夢のようで、泡のような時間だった。別れはいつも、人を優しくする。だからきっとまた、別れたくなる。運命だと思ったのに。泡のような、きみはともだち。泡のように、見えなくなってしまう。いちばんはじめに、蝉が鳴いた。

（了）